資料１

第１回会議における意見・提案の要旨

論点（追加）	文化の意義と文化政策の基本的方向性（文化に関する基本的視点）

・　「２１世紀は文化の世紀」などと言われるが、「文化」の意義・原点はどこにあるのか。

・　今後、地方における文化政策の基本的な方向性・スタンスはどうあるべきか。どのような視点でこれからの文化政策を実行していくべきか。

【意見・提案】

○　文明とは異なり、文化は小さい単位で可能となるというところに特徴がある。文化というものは発信源が小さくても、出力の非常に強い、広いところに影響を与えることのできるものではないか（伊藤委員）

○　「小さいがゆえの、弱小であるがゆえの勝者力」というのがある。福井という地域の学だけではなくて、スポーツや学芸、演芸といった文化の種類をできるだけ多様にして、文化の単位をあまり大きくしないことが重要（伊藤委員）

○　今日まで残ってきた文化は、勝ち組の文化である。この文化に歴史が付いてくるものがブランドであり、ブランドは「歴史のある文化」である。子どもたちに興味を持たせ、手を出そうと思わせるためには、「これは勝ち組で残ったもの」という見せ方をすることが重要（西委員）

○　今の言葉というものを大事にすべき。福井の文化を何とかしようという原点に立ち返ると、少し大げさな物語を皆で語りあうことが大事である。夢のようなものかもしれないけれども、その大げさな物語を何とかして実現しようというところにヒントがある。すべての都道府県を回って話をした経験から言うと、福井に一番欠けているものがこの遊びであり、笑いである（大廻委員）

○　文化は、それぞれの土地でインターナショナルなものの影響などを受けながらも、その土地の持ってきた歴史や自然、伝統と結びついて独自性を発揮するもの（佐野委員）

○　地域ビジョンの中で、観光とか産業の活性化策を論じていくと、どうしても文化資産というものが問題となってくる。文化が相当重要なポイントを占めてくる文化の時代が到来（長谷委員）

論　点	ふくいの芸術文化の振興

１－１　芸術文化活動の担い手の育成

・　若手活動者の活動参加を促進するとともに、意欲を保ち活動を継続させていくためには、行政、地域、学校、芸術活動団体等がどのように連携し、どのような対策を講じるべきか。

・　若手芸術家の育成に向け、どのような対応策・支援策を講じるべきか。

・　芸術文化の素地づくりや鑑賞の習慣づくりなど、芸術文化活動の起点でもある児童期に本格的な芸術文化体験の機会を確保するためには、どのような方策が必要か。

１－２　県民が芸術文化に親しむことができる環境の充実

・　県民の文化芸術活動への参加をさらに促進するためには、どのような仕組みづくりを行うべきか。

・　県立音楽堂や美術館、歴史博物館など県内の文化施設への来館者を増やすためには、どのような方策があるか。

【意見・提案】

１－１　芸術文化活動の担い手の育成

○　子どもの立場、担い手ということになると、「いかに見せるか、聴かせるか」ということが大事。芸術については生で聞く、絵も本物は一点しかないのでそれをいかに見るか、見せるかということが重要（長谷委員）

○　みんな本物を見たいと思っている。踏み出す気持ちをどのように起こさせるかが大事。出来るだけ小さいときに本物に触れさせることが大事（西委員）

○　例えば、音楽堂に行かなくても、学校で身近に本物を体験させるための支援も重要（竹川委員）

○　芸術文化の分野でプロになろうと思ったら、やはり身銭を切らないと身に付かないところがある。子どもや若者が芸術文化に興味を示したり、ちょっとやってみようと思わせるには、与え方のちょっとした演出が大事になってくる（西委員）

○　高校では、２０時間超えると書道、美術の先生を置こうと思うが、どうしても英語、数学などの定数配置に気を使って、芸術の先生は置きにくい。同じ定数の中で国、数、英など主要教科を何人確保するかということを校長は学校経営上考える。芸術の先生をどう確保するかという課題がある（長谷委員）

○　非常勤の美術、書道の先生は、授業だけで放課後の部活動にはいない。芸術は、放課後にキーポイントがあり、放課後の部活動が美大に進学したい子どもにとっては、授業よりも大事な芸術活動となる。そういった場合に、常勤の先生の有無が大きく影響する。若手育成という点では、高校における文化芸術活動、芸術教科の充実が必要（長谷委員）

○　戦後の福井文化では、白川文字学を確立された白川静先生が代表としてあげられるが、石川九楊先生という日本の書道の世界でトップにいる方も輩出するなど、習字の伝統があったのではないか。福井県民はみんな字が上手だという印象。いつだったか福井には書写の教育の土台があるという話を聞いたことがあるが、文化というときに「福井の文字の文化」を１つ題材にしていけないか（伊藤委員）

○　言葉というのは、「音」と「形」と「意味」がある。それが言葉の原点。形の部分が美的表現になって書写という伝統でつながっている。そして言葉をつなげば文学などいろんなところになっていく。言葉を大事にするという視点から言えば、書写教育の指導者を増やしていくことなどを考えていくべき（佐野委員）

○　２０代、３０代の若者の発表の場がない。県都に発表の場を増やしていくことが出来ないか（長谷委員）

○　２４時間夜でも使え、若者がアートできる、芝居ができる、音楽ができる場、遊びの空間が必要。福井県には、物理的にも、精神的にもそういった空間がないような気がする。それを学生に聞くと「ほしい」という、非常に強い要求として出てくる（大廻委員）

１－２　県民が芸術文化に親しむことができる環境の充実

○　子どもの側から見ると、いかに見せるか、聞かせるかという方策が非常に重要。「ふれあいミュージアム」では県立美術館から本物の絵画などを借りて見せているが、運搬する手立てが大変難しい。だから、県立美術館でも音楽堂でも、バスを若狭から出してもらっているが、今後はいかに生徒たちに見やすくできるような援助が不可欠（長谷委員）

○　県立美術館は福井県内の小・中学生から入場料を取っているが、全国的に子どもは無料になってきている。若手の育成という観点からも、子どもに対する援助が考えられないか（長谷委員）

○　熊本県立美術館、熊本現代美術館など県外の美術館では、「団体」扱いは２０人程度である。「団体３０人」というのは福井県だけだと思う。３０人いないと団体料金にならないのは古い（長谷委員）

○　各地域の文化活動は、一般県民は全然知らない。文化活動との接点というものがどこにもない。音楽堂などに出かけていって初めて見る、体験すると素晴らしいものだということが分かるが、全然そういったところに行かなければ、全く出会わない世界だと思う。いかに、県民のところへ行けるかどうかということに、文化活動が活発になるかどうかという一つの要素がある（瀬尾委員）

○　若狭町では、広報誌「わくわーく」を２年前から町民全戸に毎月配布。その結果、文化行事などに相当出かけてくるようになった。こういった情報発信も一方で大事（長谷委員）

論　点	ふくいの文化財の保存と活用

２－１　文化財の評価を高めるための方策

・　県内にはまだまだ歴史的、文化的な価値の高い文化財があると思われるが、なぜ高い評価（国の指定等）をされていないのか。高い評価を受けるためには、どのような仕組みを作ることが必要か。

２－２　文化財の活用方策

・　県内の有形無形の文化財を、県民に身近で親しみのあるものにするためには、どのような方策があるのか。

【意見・提案】

２－１　文化財の評価を高めるための方策

○　全国紙の中で福井のいい文化財を発信していけば、県民も自分の県や地域に誇りを持つようになると思うので、福井の文化財の情報をもっとたくさん教えてほしい（西委員）

○　現代に生きる者へのメッセージを伝えないと、価値が伝わらないのは事実。文化財を現代の視点から切る、そして、現代によみがえらすことが重要。そのためにももっと現地調査が必要（長谷委員）

○　朝倉氏遺跡は、文化が生きていない。行政主導ではなかなか難しいが、地域のおじいさん等が昔の服装をしながら、朝倉染などを売るといった演出が必要。そうすれば観光客もステイする（西委員）

２－２　文化財の活用方策

○　「左義長囃子」や「六斎念仏」などの地域の伝統文化を、テレビなんかでは見ているのだけれども、体験したり、現物を傍で見たりしたことはないという人がほとんどだと思う。県民がもっと文化活動に関心を持つことができるよう、地域の伝統文化を体験できる機会を充実すべき（瀬尾委員）

論　点	ふくいの地域文化の向上と継承

３－１　県民の「暮らしの質」の向上と新しい地域文化の創造

- 県民が、郷土の偉人や歴史、伝統文化（食や祭り、産業等）の良さを認識し、ふるさと福井に誇りと自信を持つことができる政策を充実･強化するためには、どのような視点や方策が必要か。
- 県民と行政との「共動システム」の視点を取り入れた、文化振興のための新しい仕組みづくりをどのように行うべきか。
- 国際化・情報化が進展する中で、県民の生活様式や「暮らしの質」を改善・向上し、これからの時代に応じた新しい地域文化を創造していくためには、どのような方策が必要か。
- また、本県の優れた地域文化を国内外に発信し、「文化の交流」（各種団体間交流、学術交流、提携・姉妹校交流等）や「人の交流」（観光客や新ふくい人の誘致等）を拡大していくためには、どのような方策が必要か。

３－２　ふくいの地域文化の未来への継承

- 少子高齢社会の中で、本県固有の優れた食や祭り、風習等の地域文化を未来に継承していくためには、どのような仕組みづくりが必要か。
- 地域の歴史的・文化的価値を有する資産の寄贈・寄託を進め、次代に引き継いでいくためには、どのような仕組みづくりが必要か。
- 消滅する恐れのある本県の地域文化等を記録し、未来に伝えていくためには、どのような方策が必要か。

【意見・提案】

３－１　県民の「暮らしの質」の向上と新しい地域文化の創造

○　福井という県が嶺北・嶺南、あるいは越前・若狭という２つの特色ある地域からなっており、複雑さも多少あるが人口８０万人とかなり小さなところに固まってまとまっている。その中に山と谷、川や大野、坂井平野の文化など小さな文化圏があって、そこからいろんな人が生まれている（伊藤委員）

○　福井は、狭い小さな土地で人口も少ないが、非常に歴史的な遺産が多く、多様性がある県。また、越前と若狭では文化圏が違う。異質のものが結びついているので、それだけいろんな活力あるものが生み出される県ではないか。その良さを生かしていくことが必要（佐野委員）

○　福井の教育は小さいがゆえに、いろいろ目配りがされている。テレビでも「福井は幼児死亡率が日本一低い」というニュースがあり、東京でも「福井は何か小さい県でどこにあるか分からないが、面白い県だ」と多くの人に印象を与えた。とにかく「日本一」が多いのが福井県の特徴であり、福井は人の生き方のモデルになり得る県である。そういったところをどう考えていくのかが重要（伊藤委員）

○　こじんまりしている福井県だからこそ、非常にこじんまりしているということをいかに生かすかということが、一番大事な分野になってくるのではないか（竹川委員）

○　福井県は、ふるさとを極めて大事にしている。また、三世代同居が多いので、教育や箸の使い方などはおじいちゃん、おばあちゃんが教える。そういう福井県の良さ、三世代の良さ、ふるさとの良さを文化面でアピールしていくことが必要（竹川委員）

○　福井には、植物の分布や言葉、アクセントの面で「合わい」の面白さがある県。（佐野委員）

○　福井は、白川静先生や橋本左内、橘曙覧など多彩な人材を輩出している県。全体の地域力、地域の文化力が、いろんな人材を生み出していくと考える。一人の人間の能力というよりも、文化は全体の力で形成されるので、福井の個性、地域性を深く掘り下げて見ていくことが大事（佐野委員）

○　若狭塗り箸という文化が福井にあるが、箸をきちんと使っているかというとそうではない。親や先生に子どもの箸の使い方の指導を任せられないのならば、福井には小笠原流という作法の家があるので、箸使い、食事の食べ方などを教えてもらうことも方法の一つ。教育の中で興味を持ってもらい、箸をデザインするという発想をしていくと文化も広がっていく（西委員）

○　別になくてもいいものだけれども、あることによって元気の源となる今日の文化というのは必要なもの（西委員）

○　文化には子どもの文化もある。童話や絵本、子ども自身が生み出す詩などもある。また、障害者の文化というものも「アウトサイダーアート」という形でアメリカなどでは同じ扱いになっている。そういう時代になってきているので、子ども文化の視点をもっと細かく論じていくことが必要（長谷委員）

３－２　ふくいの地域文化の未来への継承

○　少子高齢化でだんだん若者が減少する中で、地域の囃子を伝えていきたいと考えているが、若者が少なくて、その子に期待が集中してしまうので、皆嫌がって長続きしない。そこをこれからどうするか考えていかなければならない（瀬尾委員）